

源氏物語別本群の長文異同

——国冬本「鈴虫」の場合——

伊藤 鉄也

要旨 『源氏物語』における本文研究の分野は、六〇年以上も停滞している。今すべきことは、『源氏物語大成』で「簡略ヲ旨」とされた本文群を翻刻し直し、各本文を校合した結果をもとにして特徴のある異同を検討し、異本異文の世界の様態を探究していくことだと思う。これまでに〈河内本群〉〈別本群〉という二群の分別試案を見通しとして得ている。そのような視点から、本稿ではこれまでに指摘を見ない国冬本「鈴虫」の長文異同について考察を加える。本文異同の集積から見えてくる全体像は、まだまだ説明されていない。伝流する諸本の本文を徹底的に検証することは、文学研究の基盤整備として、早急に着手しなければならないことである。

はじめに

『源氏物語』の本文研究は、池田亀鑑氏による昭和一〇年代の成果の後、ほとんど進展していない。膨大な分量の本文資料を前にして、各研究者はその手段を模索してきた。それを手がける方が見いだせなかつたからである。そして、『源氏物語』の本文系統は、約六〇年前に池田亀鑑氏によって示された、〈青表紙本・河内本・別本〉という三分類が唯一の物差しとなり、依然として継承されている。私の研究テーマは、この諸本の本文関係を再検討することにある。現時点では、〈河内本群〉と〈別本群〉の二群に分別する試案に至っている。さらには、〈別本群〉とする各諸本の位相を、その本文のありようと内容から定位していきたいと思っている。なお、本稿で用いる〈異文〉とは、流布本（その代表とされている大島本）に対して異なる語句を示す語文を指すものであることを、まずお断りしておく。

天理図書館蔵〈国冬本〉は、その本文に特異な異同を見せることの多い写本群である。計五四冊の内、鎌倉末期書写本は一二冊（一筆書写本）であり、残りの四二冊が室町末期書写本である。その内、二五巻が『源氏物語大成』の校異に採択された。二〇巻が別本としての採用である。鎌倉末期書写本は、次の巻々である。

一 「桐壺」

二 「帚木」（錯簡・脱落あり。本文の一部が「少女」に混入）

一〇 「賢木」

二〇 「朝顔」（錯簡あり）

二一「少女」(錯簡・脱落あり。「帚木」本文の一部が混入)

二二「玉鬘」(錯簡・脱落あり。第一折「玉鬘」巻頭本文。第二折「紅梅」巻末部本文)

三四「若菜上」

三六「柏木」

三八「鈴虫」(錯簡あり)

三九「夕霧」(脱落あり)

四二「匂宮」(実は「夕霧」後半本文)

四四「竹河」(脱落あり)

「匂宮」については、「夕霧」の後半部分がその実体なので、この巻の本文は存在しない。したがって国冬本は、「匂宮」を欠く全五三冊ということになる。また、その内一八冊に錯簡・脱落がある。国冬本の詳細については、岡寫傳久子氏「源氏物語国冬本——その書誌的総論——」(『ビブリア 第一〇〇号』平成五年一〇月)に譲る。

『源氏物語大成』に別本として採択されたのは二〇巻であり、本稿で取り上げる第三八巻「鈴虫」は、校異対象の本文から除外されている。それがどのような判断からかは、今は不明である。しかし以下で問題とするように、この国冬本「鈴虫」には、長文の本文異同が多数確認できる。『源氏物語』の本文の位相を考察するにあたっては、どうしても避けられない重要な写本なのである。この国冬本の異文についてはこれまでに指摘を見ないので、本稿ではこの本を中心に考察を進める。

なお、以下で用いる写本とその略号は次の通りである(※印は『源氏物語別本集成 第十巻』未収録のもの。☆印は『源氏物語大成』の校異篇から復元したもの)。

- 大 大島本 (古代学協会蔵、『源氏物語大成』底本)
陽 陽明本 (陽明文庫蔵、『源氏物語別本集成』底本)
尾 尾州本 (名古屋市蓬左文庫蔵)
御 御物本 (東山御文庫蔵)
東 東大本 (東京大学総合図書館蔵)
麦 麦生本 (天理図書館蔵)
阿 阿里莫本 (天理図書館蔵)
中 中山本 (中山家蔵)
保 保坂本 (東京国立博物館蔵)
国 国冬本 (天理図書館蔵)
絵 絵詞 (国宝)
言※言経本 (尊経閣文庫蔵)
穂※穂久邇本 (穂久邇文庫蔵)
三※三条西本 (宮内庁書陵部蔵)
日※日大本 (日本大学総合図書館蔵)
伏※伏見本 (古典文庫)
高※高松宮本 (高松宮家蔵)
成※☆『源氏物語大成』底本 (大島本翻刻本文)

横※☆横山本

氏※☆爲氏本（島）

池※☆池田本

西※☆西下本

肖※☆肖柏本

俊※☆俊成本

家※☆為家本

雅※☆河内大島本（雅）

鳳※☆鳳来寺本

首※首書（版本、国文学研究資料館蔵）

入※絵入（版本・CD版、国文学研究資料館蔵）

湖※湖月抄（版本、国文学研究資料館蔵）

一、遅れている本文研究

『源氏物語』の本文に関して、いわゆる青表紙本でも河内本でもない一群の本文を〈別本〉と称している。これは、池田龜鑑氏の分類によるものである。この〈別本群〉が持つ本文の性格については、阿部秋生氏の『源氏物語の本文』（昭和六一年六月、岩波書店）がもっとも詳細に言及している。以下にそこから、〈別本群〉の本文異同の特色に関する

る言及部分を引いておく。

校異篇とその他数種の古写本とによって本文転化の状況を見ながらテキストを作った時の経験による主観的な感想の一つは、『源氏物語』の本文の異同は、数において決して少なくはないが、各巻の話の次第や物語の話の組織に影響を与えて、変えてしまうほどの大きな異同や激しい異同は少いということである。(中略)

青表紙本・河内本・別本のいずれの本文で読んでも、『源氏物語』の話の筋道が変わってしまうことは殆どない、変るのは表現としての微妙な陰翳・強弱だと言つてよさそうに思う。(中略)

推測にすぎないが、『源氏物語』の本文の異同のこのような性格だけから考えると、青表紙本・河内本・別本とわかれていたが、原典は一つ系統のものであったのではないかと想像される。前述したように、草稿本と清書本との間で、改訂・修正が行われたにしても、文章表現の修正・彫琢という程度のもので、物語としての話の筋道が変わってしまうほどの改訂はなかったように思う。(二二七頁―二二八頁)

現存別本諸本の本文相互に、青表紙諸本や河内本諸本の本文相互の場合よりも、数量も多く、程度も激しい本文転化があることは、その本文転化の多くは、青表紙本や河内本の成立以前、おそらくは平安時代に既に発生していたことを意味しているのではなからうか。(中略) 別本諸本の本文転化の状況を検討してみると、原典が複数であったことに理由を求めることはできないと思う。というのは、(中略) 語順や語彙が変るだけでなく、主語が変わって文の意味が変わり、物語そのものの叙述を崩している文章が、草稿本・清書本のいずれかに書かれていたことを想定しなければならないが、そのような文章を原著者が遺しておいたことを期待することはできないから

である。(中略) これらの異文を整理しようと試みても、草稿本系統の本文とか、清書本系統の本文とかのいくつかの系統に束ねることはできないと見るべきものようである。とすると、原典は複数であったかもしれないが、現存別本諸本のもっている激しい本文転化の跡は、原典が複数であったかどうかとは関係ないことで、原著者以外の人々、おそらくは書写者が、本文の混成・校訂・改訂などの手を加えたことによるものと考えられるべきなのであろう。(一五六頁―一五七頁)

別本諸本相互の異文は、青表紙諸本相互や河内本諸本相互の異文より数も多く、またその異文の中には、同一本文の一部が違っているというような書写に際しての単純な誤脱の類とは言いがたいものが時々ある。それらは、誰かの意識的な改訂かとさえ思われる異文である。何か意図するところがあつたのかどうか、その辺のことについては、今のところ、何とも推測する手がかりもないように思う。(一七七頁)

阿部秋生氏の後、池田利夫氏(『源氏物語の文献学的研究序説』昭和六三年一二月、笠間書院)・伊井春樹氏(『保坂本源氏物語解題』平成九年三月、おうふう)・室伏信助氏(『大島本源氏物語研究の展望』大島本源氏物語別巻』平成九年四月、角川書店)などによって、『源氏物語』の本文研究について示唆に富む指摘がなされている。いずれも、〈別本群〉のありように注視しながらも、その本文が未整理であるためもあつて、今後の重要な検討課題として我々に提示されているものばかりである。そのような現状を考えると、まずは本文資料の正確な翻刻にはじまり、その一々を校合することによつてはじめて、〈別本〉といわれる本文群の考察がスタートすることになる。『源氏物語大成』所収の別本は、『簡略ヲ旨』とした本文の揭示がなされているからである。

このような点から、今しばらくは、別本に視点を定めた『源氏物語』全五四卷トータルでの作品の考察は難しいと考えられる。一巻づつ、できるところから手がけるしかないのである。とにかく諸写本の翻字から、というのが現今の実状である。研究者人口に比して、『源氏物語』の本文研究は大幅に遅れているのである。

二、〈別本群〉の本文の特徴

国冬本の「鈴虫」は、『源氏物語大成』には収録されなかった。錯簡を有する写本であることと、その本文が従前のものに比べて異質な位相を多々見せるものであり、中でも五〇〇字以上もの、他本には見られない長文が出現したりする。そのようなことが要因となつてか、『源氏物語大成』に未収となつたようである。それ以外の点では、他の国冬本と違うことのない、鎌倉末期書写の貴重な写本である。

この本文に類似するものとして、前田家蔵山科言経自筆書き入れ本がある。言経本は『源氏物語大成』に収録され、次の説明がなされている。

前田侯爵家蔵山科言経自筆書入本ノ本文ハ別本ニ属シ、ソレニ山科言経ガ青表紙本ヲモツテ校合ヲ加ヘタノデア
ル。本巻ニ採択シタノハ別本ニ属スル本文デ、青表紙本ニ属スル書入ハ採択シナカツタ。

以下で確認するように、国冬本と言経本は非常に近い関係にある本文を伝流する写本である。共に書写にあたっての親本が想定されるので、このような本文が鎌倉から室町の間複数の人によつて確かに伝えられていたことは動かない。思いつきによる、一度きりの改変に終つた異本ではないのである。

「鈴虫」の〈別本群〉の中では、穂久邇本、保坂本、国冬本、言経本の四本は、類似した本文を見せる傾向がある。

まず、そのことを確認しておきたい。三〇種類の本文の校合結果を引用するにあたって用いる記号は『源氏物語別本集成』にならない、それぞれ次の書写状態を示している。

／ 付加情報 \$ ミセケチ + 補入 & ナゾリ △ 不明 || 傍書

また、諸本名に続けて明示した六桁の数字（例 380268）は、『源氏物語別本集成』の文節番号である。頭部「38」は、第三八巻「鈴虫」を示すものであり、「鈴虫」の総文節数は「1663」である。

○「よりふし」で一致

おかしけにて「大成横氏池西肖三首入湖伏麦阿中尾御俊家雅鳳」…380268

あへかにて「国」

あへかにて／あへか\$をかしけ「言」

をかしけにて「陽日穂保東高」

ひれふし「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏麦阿中東尾御高俊家雅鳳」…380269

よりふし「穂保国」

よりふし／より\$ひれ「言」

給へり「大陽成横氏池西肖日三首入湖保麦阿中東高」…380270

たまひり／ひ\$へ「御」

たまへり「伏穂尾俊家雅鳳」

給へりきはもなくあてにうつくし／きはもなくあてにうつくし\$「言」

給へりきはもなくあてにうつくしう見え給【国】

穂久邇本・保坂本は、「あへかにて」という語句においては国冬本・言経本と異同を見せるが、「よりふし」で一致している。ただし、続く「きはもなくあてにうつくし」ではまた異同を示す。こうしたところに、穂久邇本・保坂本と、国冬本・言経本の関係が見て取れる。

○「あはれなり」で一致

さまざまに「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏麦阿中尾御高俊家雅鳳】…380304

さまざまにあはれなり【穂保国】

さまざまに哀也／哀也\$【言】

ナシ【東】

ここでは、穂久邇本・保坂本と国冬本・言経本は一致している。

○「いまは」で一致

御そふうんの「大成横氏池西肖日三首入湖言尾御高俊家雅鳳】…380483

そふうの【麦阿】

御かうのいまは【国】

御せうふんの「陽中」

御せうふむの「伏」

御そふんの「穂保」

御僧ふんの／僧〓そう「東」

宮に「大陽成横氏池西肖日三伏麦阿東尾高俊家雅鳳」…380484

みやに「日首入湖中御」

みやにいまは「保」

宮にいまは「穂」

宮にいまは／いまは\$「言」

宮の「国」

穂久邇本・保坂本・言経本と国冬本とは、「いまは」という語句の位置にズレはあるが、四本ともに特徴的な語句を伝えていることが確認できる。

○「にはかに」で一致

あるへかりつるを「大陽成横氏池西肖日三入湖伏中東尾御高俊家雅鳳」…380918

あるへかりけるにいにかに「穂」

あるへかりけるにはかに「保」

きこしめしつへかつるをにはかに／かつ〈ママ〉〔国〕

有へかりつるを〔首〕

有へかりつるをにはかに〔言〕

有へきをと〔麦阿〕

穂久邇本は「にいかに」ではあるが、ここは保坂本・言経本・国冬本と同じように「にはかに」という同一の語句だったと見なしてよい例である。

ここにあげたものは、ほんの一例である。穂久邇本・保坂本・言経本・国冬本の四本の間には、他本には見られない類似する語句が多々確認できる。本稿は長文の異同にだけ考察を加えるものであり、この種のこまかな異同の集積による諸本間の位相については、別稿にまとめる予定である。

三、国冬本の長文異同箇所を検討一

『源氏物語』の本文異同には、二、三語程度の相違を見せるものがほとんどである。しかし、「鈴虫」における特徴は、一〇語以上からなる文章が挿入されたかのような形で存在していることである。その文章が意味を持つものであり、単なる改変・改作とは言えないために、後人の説明的な性格の挿入文と見られるかもしれない。しかし、その実体はどのような単純なものではない。問題とし得る一四種類の用例をあげて、順次考察を加えていきたい。本文の引用にあたっては、いわゆる青表紙本とされる流布本としては『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』(伊井春

樹編、平成一二年一月、角川書店)を用いた。それ以外の諸写本については、『源氏物語別本集成 第十卷』(伊井・伊藤・小林編、平成一二年四月、おうふう)の翻刻本文および私に翻字した資料を用いる。ただし、国冬本などの写本からの引用にあたっては、適宜漢字と句読点をあて、理解を助けるためのメモをカッコを付して挿入した。文意不明な箇所はそのまま明示する。原文表記のままの翻刻本文は、本稿末尾に〈注〉として一括掲載した。以下、本文を追って例示し、それぞれに考察を加えていく。

宮(女三の宮と)、

隔てなく蓮の宿を契りても君(光源氏)が心やすまじとすらむ

と書きたまへれば、

「言ふかひなくも思ほし朽たすかな」

と、うち笑ひながら、なほあはれとものをおもほしたる御けしきなり。「ここに国冬本異文あり〈文例1a〉」
【小見出し3/法服は紫の上が準備、源氏は簡素に思っていたものの、帝、院の布施により盛大となる】
例の、親王たちなどいとおまた参りたまへり。「ここに言経本異文あり〈文例1b〉」御かたがたより、われもわれもといとなみいでたまへる捧物のありさま、心ことにところせきまで見ゆ。

(角川CD小見出し2~3、『源氏物語別本集成』380356)

この場面で、国冬本には女三宮の和歌の直後から脱文があり、「言ふかひなくも思ほし朽たすかなと、うち笑ひながら、なほ」という光源氏のことがない。そして、「あはれとものをおもほしたる御けしきなり。」に続けて、次の七

七文字もの異文が見られるのである。

〈文例 1 a〉

【国冬本 38035】とみにも、（女三宮が）え出で給はず。とばかり（しばらく）（光源氏は女三宮のいる西廂に）おはします。（女三宮の）御乳母、古き人々も、みな、（女三宮の出家という）悲しき事を思ひつゝ、うち泣き合へり。東の障子の中にぞ、御座あれば、（光源氏は）そなたに渡り給ぬ。

ここはちょうど、流布本の小見出しでいえば 2 から 3 へと大きく話題が転換する部分にあたる。国冬本が欠く内容は、女三宮の返歌に対する光源氏の反応がないことである。従来の本文に加わる内容は、持仏開眼供養のために慌ただしく立ち働く光源氏の行き来と、女三宮付きの乳母たちの嘆きなどである。言経本は、この国冬本とほぼ同文を、次のように伝えている。

〈文例 1 b〉

【言経本 38036】とみにも、え出で給はず。とばかりおはします。御乳母たち、古き人々など、いまさらに、かなしき事を思ひつゝ、うち泣きあへり。東の中の御障子口に、御座あれば、そなたに渡り給ぬ。

ただし、言経本のこの異文は、国冬本とは違う場所に位置している。流布本の「例の、親王たちなどいとおまた参りたまへり。」の直後なので、話題が転換してからの文中の異同である。この国冬本と言経本の異文が、ほぼ同じ

長文でありながらその位置を異にしているということは、どういう意味を持つものであろうか。書写にあたって用いた親本もしくはそれ以前の写本にあった補入の文章が、その補入箇所（普通は小さな○印）を間違つて本行本文中に取り込んだため、結果的にズレた本行に混入した形で書写してしまったということが考えられる。文意からして、この異文は国冬本の位置がふさわしいので、言経本の方に何らかのミスが生じたものと考えてよからう。つまり、言経本の親本以前の段階で、この異文が補入扱いになっていたことが想定できよう。このことは、次の《文例2》でも言えることである。

それでは、なぜ国冬本と言経本だけが、こうした本文を伝えているのであろうか。これまでに説明的な文章に改変されているとして指摘を受けている異文は、少なくとも一〇字に満たない異同であった。初巻「桐壺」における「大液芙蓉未央柳」と「おはなの風になひきたるよりも」などは、数少ない長文の異同例なのである（拙稿「絵に描ける楊貴妃攷」『源氏物語受容論序説』平成二年一〇月、おうふう）。

四、検討二——段落に集中する場合

まず、異同が発生する場所を確認するためにも、長くなるが該当個所の流布本本文をあげる。

ゆふべの寺におき所なげなるまで、ところせき勢ひになりてなむ僧どもは帰りける。

【小見出し4／女三の宮は朱雀院から相続した三条院に別居、源氏は経済的な援助を配慮】

「ここに国冬本異文あり《文例2 a》」今しも心苦しき御心そひて、はかりもなくかしづききこえたまふ。

「ここに国冬本言経本異文あり《文例3》」院の帝（朱雀院）は、この御処分の宮に住み離れたまひなむも、つひのことにてめやすかりぬべく聞こえたまへど、

「よそよそにては、おほづかなかるべし。明け暮れ見たてまつり聞こえうけたまはらむこと怠らむに、本意たがひぬべし。げに、ありはてぬ世いくばくあるまじけれど、なほ生ける限りの心ざしをだに失ひはてじ」と聞こえたまひつつ、「ここに言経本異文あり《文例2b》」この宮をもいとこまかにきよらに造らせたまひ、御封のものども、国々の御庄、御牧などよりたてまつるものども、はかばかしきさまのは、みなかの三条の宮の御倉にをさめさせたまふ。またも建てそへさせたまひて、「ここに国冬本と言経本に異文あり《文例4》」さまたまの御宝物ども、院（朱雀院）の御処分に数もなくたまはりたまへるなど、あなたさまのものはみなかの宮に運びわたり、こまかに「ここに国冬本と言経本に異文あり《文例5》」いかめしうしおかせたまふ。明け暮れの御かしづき、そこらの女房のことども、上下のはぐくみは、おしなべてわが御あつかひにてなど、いそぎつかうまつらせたまひける。

（角川CD小見出し3〜4、【源氏物語別本集成】380474）

「鈴虫」の第三節から第四節へと話題が変わるところで、国冬本には次の長文異同が見られる。この国冬本では、柏木との懊悩から女三宮が仏道に専念できないことを語っている。

《文例2a》

【国冬本380473】帰りける。宮（女三宮は）、月ごろなん、恐ろしかりし（柏木との）御事、名残悩ましう思されて、御行ひなどもけざやかに、え習ひ給はず。（女三宮は）御念仏のれう（用品）の数珠ひき隠し、紛らわし給へるを、

(光源氏は)今はかゝる方の(女三宮出家という)御ありさまにてもなし(もてなし?)聞へ給て

ここで不可解なのは、言経本がこの後の「聞こえたまひつつ」と「この宮をも」の間に、次のような国冬本とほぼ同様の異文を伝えていることである。

〈文例 2 b〉

【言経本 380515】給。宮は、恐ろしかりし御事の、名残悩ましう思されて、行なひなどもけざやかに、えつとめ給はず。御念仏ばかりの数珠ひき隠して、ゐ給へるを、今はかゝる方の御ありさまにしるし奉りて

これをどう理解するのか。〈文例 1 a・b〉のようにすぐ近くにズレていればまだしも、大島本でいえば七一文字、国冬本・言経本ではそれ以上も離れたところに出現するのである。写本でいえば、ほぼ四行分(二行一八文字換算)ほどの分量の文字を隔てて、このような異文が現れるのである。〈文例 1 a・b〉で確認したことに照らし合わせると、言経本の親本に異文注記の貼紙があったと仮定し、そこに記されていた異文校合がここに混入した、と見るべきではなからうか。異文が収まる場所としては、国冬本の位置の方がふさわしいからである。また、貼紙を想定するのは、四行分の文章を行間および四囲の余白に追記するのは無理があるからである。管見による限りではあるが、三行までの後補は実見している。しかし、一一行書きの写本の行間および余白に四行分の追記は現実的ではない。この想定は、後出の例を考える上でも蓋然性の高いものであると思われる。

さて、この国冬本の異文箇所〈文例 2 a〉の直後に、また別の異文が次の〈文例 3〉のように見られる。これは、

「かしづききこえたまふ。」と「院の帝は、」との間に、国冬本・言経本ともに確認できるものである。内容は、経を教える光源氏と、世の憂さを思う女三宮のことを語る文章である。誤字・脱字が多数認められ、文意不通の箇所もある。言経本の異文を参照しながら、一応次のように読んでおく。

〈文例3〉

【国冬本380480】給。経など（光源氏は）御みづから（女三宮に）教へ聞え給。又、さるべき尼たちなどのせかいゐん（齋院？）のあたりになり、ふから（深う？）物など習ひし世を過ぐす類ひは失せに、たれど、人なごやか（な脱？）らず、み、（こゝろ？）ばせあい（る？）を（次の語彙不明）いにふはしく、尋ねとらせ給べきに、（光源氏は）思しおきてたり。世中ひとへに思しおこり（あがり？）、遊び、たはぶれ事に、うつらせ給に、来し方こそ、少しいはけたる（幼稚な）事もおはしましたけれ。世の憂き事を、人知れず思し知る我が御心づからの事にはあらねど、なを「心遣ひすべき世にこそありけれ。」など（女三宮は）思しわかる、事どもありて、いと深うのどやかに（女三宮は）御行ひをし（給脱？）。国冬本は「御やまの」と続くので、「御」と「給」の目移りによる脱字か）

【言経本380480】給。経なども、みづから教へ聞え給。又、さるべき尼たちの、齋院（若菜下の人か）のあたりなどにてさへ、深く物よく習ひて、人柄もいやしからず、心ばへあるなどを、尋ねとりて、さ、はせて、物ならはせ給べく、思しをきてたり。世中をひとへに思しあかり、遊び、たはぶれ事にうつり給し、来し方こそ、少しいわけたる事もおはしましたけれ。かの憂き事も、人知れず思し知り、我御心づからのどかにはあらねど、猶心遣ひすべき世にこそありけれ、など思しわくともありて、いとかくのどかに御行ひをし給

これは《文例2》と合わせて、実に三七七文字もの長文の異文となるものである。特に、女三宮に関する描写部分であることから、女三宮についてこのように筆を費やして語ろうとした異文があったことが確認できる。これを、後人の感情移入からの補筆とか、説明的な文章として補訂したものだとして処理するには、言経本との関係からも無理がある。今は、『源氏物語』の本文の伝来途上における異文の残存と理解し、それは国冬本が書写されたと思われる時代を考えて、ひとまず鎌倉時代末期までの異文の残滓としておきたい。

さらに次の例は、これまた説明に窮するものである。

朱雀院は、父桐壺院から伝領した三条宮に娘女三宮が移り住むタイミングは今であると判断する。しかし、光源氏はその意向に反対しながらも、三条宮の手入れを進めるのであった。二品親王である女三宮の位封は三百戸であり、その収納物のすべては、三条宮の御蔵にしまうのであった。この三条宮を、国冬本は「二条の院」とし、麦生本・阿里莫本は「三条院」とする。国冬本が「三条院」の誤写だとしても、このすぐ後の次の異文はどう理解すべきであろうか。

《文例4》

【国冬本380539】 給へど、はた、近江のは、つ（御？）くらよりもいかめしき物々は、細かにつきせず、さまざまにしをかせ給つ、色々の

近江国からの収納献納物が多かった、ということであり、三条の御蔵にこの近江からのものも収納したことになる。女三宮に関連して、ここで近江という地名をとりたてて持ち出す必然性がわからない。これまでに、これからも、

この地は物語に直接関係しない。近江君とも、もちろんここでは関係のないことである。そしてこのすぐ後に、国冬本も言経本も次のように、女三宮の行く末を思う光源氏に触れている。

〈文例5〉

【国冬本380534】 よろづに、口すさまじう、行く末の（女三宮の）御ありさまを、思しやりて

【言経本380534】 よろづ、口すまじう、行く末の御ありさまを思しやりつ、

〈文例5〉だけを取り上げれば、国冬本も言経本も説明的な文章になっていると言える。しかし、その前の〈文例2・3・4〉などを考え合わせると、単なる説明文への変質とは思えない性格を有する異文の数々なのである。

五、検討三―脱落と混入による場合

次は、脱落と混入が関わる例である。まず、該当個所の流布本をあげる。

秋ごろ、西の渡殿の前、中の塀の東のきはを、おしなべて野に造らせたまへり。閑伽の棚などして、そのかたにしなさせたまへる御しつらひなど、いとなまめきたり。「ここまで国冬本脱落。《文例6》に混入」御弟子に従ひきこえたる尼ども、御乳母（女三の宮2の乳母）、古人どもはさるものにて、若き盛りのも、心定まり、さるかたにて世をつくしつべき限りは、選りてなむなさせたまひける。さるきほひには、われもわれもときしろひ

けれど、大殿の君（光源氏）きこしめして、

「あるまじきことなり。心ならぬ人すこしもまじりぬれば、かたへの人苦しう、あはあはしき聞こえいで来るわざなり」

と、いさめたまひて、十余人ばかりのほどぞ、かたちことにてはさぶらふ。「ここに国冬本異文あり《文例6》」この野に虫ども放たせたまひて、風少し涼しくなりゆく夕暮れに渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、「ここに国冬本と言経本に異文あり《文例7》」なほ思ひはなれぬさまを聞こえ悩ましたまへば、例の御心はあるまじきことこそはあなれ、とひとへにむつかしきことに思ひきこえたまへり。ひと目にこそ変はることなくもてなしたまひしか、うちには憂きを知りたまふけしきしく、こよなう変はりにし御心を、いかで見えたてまつらじの御心にて、多うは思ひなりたまひにし御世のそむきなれば、今もて離れて心やすきに、なほかやうになど聞こえたまふぞ苦しうて、人離れたらむ御住まひにもがなとおほしなれど、およすけてえさもしひ申したまはず。

（角川CD小見出し4後半、『源氏物語別本集成』380571）

ここに引用した流布本の冒頭部分で、「秋ごろ、西の渡殿の前、中の塀の東のきはを、おしなべて野に造らせたまへり。関伽の棚などして、そのかたにしなさせたまへる御しつらひなど、いとなまめきたり。」とあるものは、国冬本にはないのである。そして、この段落末尾の「十余人ばかりのほどぞ、かたちことにてはさぶらふ。」の次に、国冬本には次の長文がある。そしてそのちょうど中程以降に、脱落したと思われる冒頭部分の文章が混入している。ただし、その混入した本段落冒頭部分も、国冬本は大きな異同を見せる異文となっている。

物語られる場所は、女三宮が住む寝殿の西渡殿の前。その庭の泉水や石組などの描写が、より具体的に語られてい

ることがわかる。

〈文例6〉

【国冬本380636】 さぶらふ。袖どもよりも、こと加へさせ給て、(女房達の)さまことに思をきてさせ給を、行ひよりほかに、この世の営み、心乱るまじきほどにと、(光源氏は女房達に)よろづをとぶらはせ給。(以下、本段落冒頭での脱落部分が混入) 秋のころ、西の渡殿の前の中い(塀?)の東の庭(際?)を、おしなべて野に作らせ給へり。閑伽奉る宿のたれ(な?)、棚)して、泉の水をくむべきと、かひ(?)の石など、いとなまめきて、し加えさせ給て、御しつらひ、ことなるをもさま変はり、あはれに見給て、明け暮れは花の露とぞ落ちつ、つとめだに尼君たちのありさま、中々に思ふことなげ也

「秋のころ」以下は、国冬本の脱文箇所が本段落末尾に混入したと思われるものである。この直後の「この野に虫ども放たせたまひて」の所で、国冬本には「むし」という語句の目移りによる脱落がある(『源氏物語別本集成 第十卷』06389～0649)。大島本で二九文字分なので、写本でいえば二行分である。先の異文とは無関係の所なので、こは国冬本の単純なミスと考えてよからう。

さて、この例は国冬本の本文の形成過程を考える例ともいえる。国冬本の長文異文は、女三宮に従って尼姿になった女房達への光源氏の配慮を語るものである。また、混入部分はこの段落冒頭部分にあったはずの話題転換箇所、女三宮の庭の描写部分でもある。この描写が、次の「この野に虫ども放たせたまひて、風少し涼しくなりゆく夕暮れに渡りたまひつつ、虫の音を聞きたまふやうにて、」に続いていく。一連の流れの中の異文となっているものである。

国冬本のこうした異文の中に混入した異文は、どのような過程で発生したのであろうか。物語作者の手を離れる段階で起きるものではなからう。物語作者の手による推敲過程か、補訂段階か、もしくは後の書写者の改変・改作の時か。いずれにしても、これだけの長文である。メモ類の添付・貼込が想定されるところである。特に、異文の中への異文の混入は、貼紙の場所がズレたままを写し取ったためとしか考えられない。異文が長文であるだけに、補入記号や補助線による補訂・書き込みは考えにくいからである。すでに言経本で推定した、貼紙による異文表記らしきものが、この国冬本の親本の数段階前のものにもあてはまる状況を見せてくれる例だと思われる。あくまでも、国冬本・言経本の書写にあたっての親本以前の段階での本文のありようを示すものであることはもちろんである。現存国冬本・言経本は、そのような伝流本文を反映した親本を、いわば忠実に書写しているといえよう。

そして、この「虫の音を聞きたまふやうにて」の次に、また以下の異文《文例7》が確認できる。
これは、女三宮と語らう光源氏について言及するものである。

《文例7》

【国冬本 380653】 やうにて、（光源氏は）のどやかにおはしまし、御物語なども（女三宮に）聞え給に

【言経本 380653】 やうにて、のどやかにおはします。御物語など、聞え給に

これまでの例で明らかかなように、長文異同のすべてが女三宮に関するものであることに注目しておきたい。

なお、この段落を、『新編日本古典文学全集』では「〔五〕女三の宮の出家生活 源氏の未練を厭う」という小見出しを付しているが、『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』の本文では、ここは話の区切り目とせず、小見出し

がない。

六、検討四—繪巻詞書直前の五三九字の異文

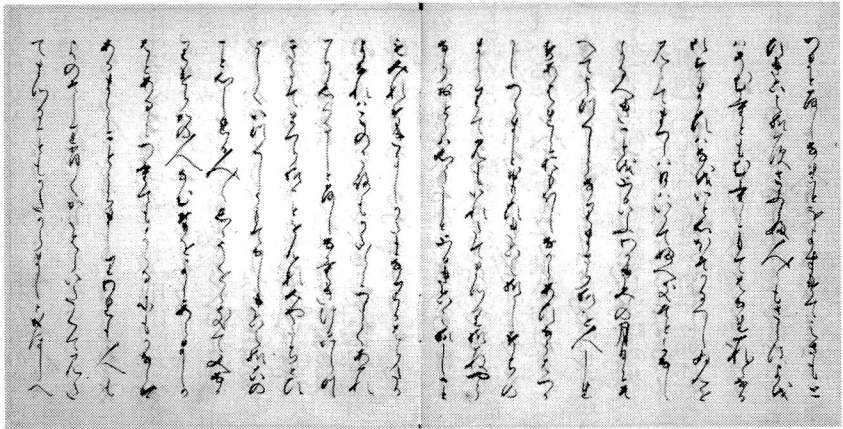
前段落末尾の「およすけてえさもしひ申したまはず。」から次の段落にかけて、国冬本には五三九文字もの長文の異文が確認できる。次の段落とは、平成一二年七月発行の新二千円札裏面に印刷されて有名になった、『源氏物語繪巻詞書』の「十五夜の夕暮に、仏の御前に宮おはして云々」という所である。言経本にも国冬本の異文の断片が伝流している。この長大な異文は、国冬本だけの独自異文ではないのである。

この異文の特徴は、文字数において長いばかりでなく、また話題転換部分である以外に、この異文の中に七人も人物が登場していることである。そこには、女三宮・薫・光源氏・小侍従君・柏木・夕霧・一条御息所の動静が語られるのである。特に、柏木の乳母の姪で、柏木を女三の宮のもとに手引きした小侍従君は、流布本本文では、第三四卷「若菜上」・第三五卷「若菜下」・第三六卷「柏木」の後、第四五卷「橘姫」に登場する人物である。また一条御息所は、朱雀院の更衣で落葉の宮の母親である。婿柏木の早逝に娘の薄幸を嘆き、さらには夕霧と娘の仲を苦慮し、夕霧の誠意を確かめるために消息を送るが返事がない中で、夕霧の冷淡さを恨みながら死去するのである。流布本によれば、第三四卷「若菜上」・第三五卷「若菜下」・第三六卷「柏木」・第三七卷「横笛」の後、第三八卷「鈴虫」を飛び越して第三九卷「夕霧」、そして第五三卷「手習」に登場する。こうした人物の「鈴虫」のこの場面での登場は、どのような意味を持つのであろうか。私は、物語作者が、ここでひとまず筆を擱いた時の本文の姿を伝える異文ではないか、と思っている。第二一卷「少女」や第三三卷「藤裏葉」において、登場人物の多くが呼び出されていた

ことに思いを致すからである。この国冬本の長文異文が、「鈴虫」の後半から次巻「夕霧」が執筆される以前に存在したと思われる本文の断片と見るのは、空想に過ぎないのであろうか。

〈文例 8 a〉

【国冬本 38711・次頁写真参照】 給はず。(女三宮に) さぶらふ人々も、「さらば世をば背けども、むげにもて離れ、つれ／＼なる御住ひは、なを、いと心細かるべし。院(光源氏)を見奉らば、日はいかで経べきぞ」と、かなしかるべき事を、(人々は) 思ひ言ふ。若君(薫)の、月日にそへて美しうなりまさり給を、人知れず哀れに(女三宮は) 思ほしながら、あひなう恥ずかし、慎ましと思ひ聞え給し筋のまじりて、見も入れ奉り給はぬやうなり。大殿(光源氏)は心憂しと思ひ聞え給し事も、みな過にし方になり変りたる世なれば、この頃も、方々につらく哀れに心苦しと思し嘆きける、かしづき奉り給事、女宮たちと等しくいつくしう、もてなし聞え給。この異心知れる人々、(柏木を手引きした)(小)侍従を、きて、又、なかりけり。かの人(柏木)なむ、なを世にあらましかばとあるにつけても、かゝるにも、必ずあるまゝに、ことうち混じり、我も人も、世のそしり多く、かたはらいたくて、見奉る事も、かたからましと(光源氏が) 思し隔つるにも、世に惜しまれ、あかぬ人にて(柏木が) 失せたるは、いと哀れにて、命をさへ、心ある人の契りとなむ、(光源氏は) 思しける。(夕霧は) かの一条の宮(一条の御息所、落葉宮の母)の心ばせ浅からず、うち眺め過すらん。(一条の宮を) 思しやるに、(夕霧は) いと心苦しければ、時々は消息など(一条の宮に) 聞へ給えりけり。いにしへならば、なをもあらぬ心そひぬべきあたりと思ほすにぞ、大将(夕霧)の御まめやけは片時おぼし知られける



天理図書館蔵「国冬本 鈴虫」第三丁ウラ・第四丁オモテ
二行目「ひきこえ給はすさふらふ人へもさらはよを」



第四丁ウラ・第五丁オモテ
九行目「はかた時おほしゝられける十五夜の月」

この長文異文が、後に破棄されたものではないかと想定した場合、この文章が他の巻などに再活用されていないかを見ておきたい。

○「月日にそへて美しう」↓「月日にそへて、この君のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし。」〔新編日本古典文学全集〕横笛、三五二頁

○「心ある人の契りとなむ」↓「宮は、さしも思しわかず、人、はた、さらに知らぬことなれば、ただ一ところの御心の中のみぞ、あはれ、はかなかりける人の契りかなと見たまふに、おほかたの世の定めなさも思しつづけられて、涙のほろほろとこぼれぬるを、今日は事忌すべき日をとおし拭ひ隠したまふ。」〔新編日本古典文学全集〕柏木、三二三頁

○「かの一条の宮」↓「かの一条の宮にも、常にとぶらひきこえたまふ。」(柏木)「かの一条の宮をも、このほどの御心ざし深くとぶらひきこえたまふ。」(横笛)「よべかの一条の宮にまうでたりしに、おはせしありさまなど聞こえいでたまへるを、ほほ笑みて聞きおはす。」(横笛)「丑寅の町に、かの一条の宮を渡したてまつりたまひてなむ、三条殿と、夜ごとに十五日づつ、うるはしう通ひ住みたまひける。」(匂宮)

○「心そふ」↓六例すべて若菜上以降の巻・「心そひて」(若菜上)「心そひたる」(若菜上)「心そひて」(鈴虫)「心そひて」(紅梅)「心そひたまへり」(宿木)「心そひたまへる」(東屋)

異本中のことばの類似表現を、流布本に近い本文を持つものの中から探してみた。〈文例8a〉の異文からは、四種類の語句に関連した例しか確認できなかった。そしていずれもが、この〈文例8a〉の異文が「源氏物語」の第二

部である「若菜」以降のことばづかいと対立するものではないことが確認できた。いわゆる青表紙本以外の本文との照合は、翻刻資料が調い次第に探究していくつもりである。破棄された本文の再活用という事例の確証は、今のところは得られていないが、今後とも注目したいパターンの異文であることに変わりはない。

こうした異文の例は、「輝く日の宮」巻を廃棄した後の再利用の可能性などと関連する問題として、いろいろと想像を掻き立ててくれる異文である。今後とも、さまざまな視点で読み解いていきたい。

この国冬本の長文異同箇所に対して、言経本は次のような異文を伝えている。

〈文例 8 b〉

【言経本 38711】 給はず。さぶらふ人も、さこそ世を背きけれど、む下にもて離れつ。(脱文有?) 御まめけは、ありたたとじと思しける

ここには、明らかに脱落が考えられる。言経本が、国冬本の異文の冒頭と末尾だけを伝えていることの意味は何なのか。私は、これも前述のように、貼紙形式で貼付されていた異文表記があまりに長文であるがために、その首尾だけ残して伝えられたために生じたものと考えている。いわゆる、「く」「……」という省略記号による手法の一つではなからうか。いずれにしても、言経本が伝えようとした本文は国冬本と同種のものであることは明らかである。

なお、『源氏物語絵巻詞書 鈴虫一』の本文は、右にあげた〈文例 8〉直後のものである。絵巻詞書の性格がよくわかる例として〈文例 9〉をあげておく。

《文例9》

あるへき〔大陽成横氏池西肖日三首入湖伏中東絵俊〕…380792

ありけれ〔阿〕

有けれ〔麦〕

有へき〔言〕

あらん。いと、まれにほのめくねなど、げにこそ異なるを〔保〕

あらん。いと、まれにほのめくねなどは、げにこそ異なるを〔国〕

あらん。いと、まれにほのめくねなど、げにこそ異なるを〔穂〕

あるべき。いと、まれにほのめくねなど、げにこそ異なるれ〔御高家雅鳳〕

あるべき／き+いと、まれにほのめくねなど、げにこそ異なるれ〔尾〕

「あるへき」とする絵巻詞書に対して、国冬本・保坂本・穂久邇本などは「いと、まれにほのめくねなどは、げにこそ異なるを」という本文が加わった形となっている。これだけを見ても、明らかに異なる本文であることがわかると思う。ただし、現在確認できる本文の中では、国冬本や言経本は、その一部が『源氏物語絵巻詞書』に近似する例もしばしばあるので、今後ともこれらの異本群の本文は注目していく必要がある。

七、検討五―光源氏中心の異文へ

前項で検討した〈文例8〉は、それまでの異文が女三宮中心であったものから、物語中の他の人物へと視点が移っていくものであった。以下の例からは、それが光源氏を中心とした異文となっていくことがわかる。

次の例は、光源氏の心中を述べる下りである。流布本本文をあげる。

月さしいでいとほなやかなるほどもあはれなるに、空をうちながめて、世の中さまざまにつけて、はかなく移り変はるありさまもおほし続けられて、例よりもあはれなる音にかき鳴らしたまふ。「ここに国冬本異文あり

〈文例10〉

【小見出し6／宮中での月の宴が中止となり、人々は源氏のもとに参集、三条宮での鈴虫の宴となる】
今宵は例の御遊びにやあらむ、とおしはかりて、兵部卿の宮（蛩宮）渡りたまへり。

(角川CD小見出し5〜6、【源氏物語別本集成】3809(9))

この「例よりもあはれなる音にかき鳴らしたまふ」の直後に、次の異文がある。話題転換部分にあたるこの異同である。

〈文例10〉

【国冬本380868】給ふ。思しひ（ひし？）時なれど、げに折につけてよはり時につけて、よろづのもの、哀れも取り合はせたる心地するに、（光源氏は）みづからの心地にも留めがたう、よろづ思しつづけらるゝ、

次の例は、中秋の名月の夜の遊宴の場面である。まず、流布本をあげる。

故権大納言（柏木）、なにのをりをりにも、亡きにつけていとどしのばるること多く、「ここに国冬本と言経本に異文あり『文例11』」おほやけ私、もののをりふしの匂ひ失せたるこちこそすれ。

（角川CD小見出し6中半、『源氏物語別本集成』380959）

この光源氏が話すことばの中の「いとどしのばるること多く」と「おほやけ私」との間に、次の異文『文例11』がある。柏木の楽才に思いを致す光源氏が語られているのである。これは、話題の転換部分ではない。

『文例11』

【国冬本380967】 多かる中にも、（柏木は）遊びの方のものはへは、限りなき心地し侍ける
【言経本380967】 多かる中にも、遊びの方のもの、はへは、こよなう失たる心地ぞしける

次にあげるのも、話題の転換部分ではない箇所而异同である。光源氏は秋好中宮のもとを訪れ、自分が出家した後の夕霧・紫の上などの世話を依頼する場面である。

のこりの人々のものはかなからむ、ただよはしたまふな、「ここに国冬本と言経本に異文あり《文例12》」とさ
きざきも聞こえつけし心たがへず、おほしとどめて、ものせさせたまへ」
など、まめやかなるさまに聞こえさせたまふ。
(角川CD小見出し8中半、『源氏物語別本集成』381256)

流布本の、「ただよはしたまふな」と「きざきも聞こえつけし」との間に、次の異文《文例12》がある。これは、
秋好中宮に語る光源氏の心中の一部分である。

《文例12》

【国冬本381259】 漂はしなど、さまざまに思ひ給へ乱れてなん、今まで侍べる

【言経本381259】 漂はさでなど、さまざま思給乱れて、今まで侍

これも、内容を補足する程度の異文といえよう。

次の例は、これまでとその性格を異にする。話題の転換部分ではない箇所に加えて、保坂本と穂久邇本が長文の異文を伝えている。ここからもう少し後に、場所はズレるが、言経本がほぼ同文を伝えている。

まず、流布本をあげる。

「げに、おほやげさまにては、限りあるをりふしの御里居もいとよう待ちつけきこえさせしを、今はなにごとに

つけてかは、御心にまかせさせたまふ御うつろひもはべらむ。さだめなき世と言ひながらも、さして厭はしきことなき人の、さはやかにそむき離るるもありがたう、心やすかるべきほどにつけてだに、おのづから思ひかかづらふほだしのみはべるを、などか、その人まねにきほふ御道心は、かへりてひがひがしうおしはかりきこえさする人もこそはべれ。「ここに保坂本と穂久邇本に異文あり『文例13 a』」かけてもいとあるまじき御ことになむ」と聞こえたまふを、「ここに言経本異文あり『文例13 b』」深うも汲みはかりたまはぬなめりかし、とつらう思ひきこえたまふ。

(角川CD小見出し8後半、『源氏物語別本集成』38131b)

これは、光源氏が秋好中宮の出家の意向を認めないことを語る場面である。この光源氏のことばで、「かへりてひがひがしうおしはかりきこえさする人もこそはべれ。」と「かけてもいとあるまじき御ことになむ」の間にあるのが、保坂本と穂久邇本の次の長文異同(『文例13 a』)である。

〈文例13 a〉

【保坂本381364】 げに、長き世の闇を思ひやるには、かりそめのこの世の、いさ、かなる人のもとにばかりなどに、思ひはばかりんも、いと幼なかるべき事なれど、さなん侍りける御位を極め、よろづの事、この世にあかぬ事なき(中宮の)御身なれど、今ひき返し少しも世のうちかたぶきぬべからん事は、(出家のことなど)さらに思しよらでんよかるべき。尊き道を心ざし、御心一つをすまさせ給とも、女の御身は何事も

【穂久邇本381364】 げに、長き世の闇を思やるには、かりそめのこの世の、いさ、かなる人のもどきばかりなどに、思ひはばかりんも、いと幼なかるべき事なれど、さなん侍ける御位を極め、よろづの事、この世にあかぬ事なき御身

なれど、今ひき返し少しも世のうちかたぶきぬべからん事は、さらに思しよらでなんよかるべき。尊き道を心ざし、御心一つをすまさせ給とも、女の御身は何事も

これが、言経本では、その少し後の「御ことになむ と聞こえたまふを」と「深うも汲みはかりたまはぬなめりかし」との間に、次の異同〔文例13 b〕を見せる。

〔文例13 b〕

【言経本381369】 給ふを、げに長き世の闇を思やるには、かりそめの世のいさ、かなる人のもどきなどばかりに、思ひはばかりも、いと幼なかるべき事なれどをのづから、さなん侍ける御位を極め、よろづの事、この世のあかぬ事なき御身なれど、今ひき返し少しにても世のうちかたぶくべからん事は、さらに思しよらでなんよかるべき。ただ、尊き道を心ざし、御心一つをすまさせ給とも、女御の御身は何事も（以下、保坂本と穂久邇本にはない）所せきなん、いとをしう侍と聞え知らせ給を

この言経本末尾の「所せきなん、いとをしう侍と聞え知らせ給を」は、言経本の独自異文である。なお、国冬本のこの部分には本文異同はない。言経本の異同が他の二本、保坂本・穂久邇本よりその場所が少しズレているのは、ここでも貼紙に書かれていたものがその挿入箇所を間違えて伝流した可能性を考えてよからう。ただし、国冬本がこの異文を伝えていないのはなぜだろうか。これまで、少し長い異文については、言経本は国冬本と連動するかのようにして異文を伝えていた。ここだけが言経本の独自異文となっているのは、国冬本のミスを考えることもできる。この

異文は、言経本で一九五字、保坂本で一八二字、穂久邇本で一七五字の分量である。国冬本「鈴虫」の書写本文は、一行一六字から二〇字で一行書きが基本となっている。つまり、ちょうど一頁分の分量を欠いていることになる。目移りではなくて、一紙面分の写し飛ばしによる欠脱という可能性がある。しかし、これまでの国冬本には、小さな書写上のミスは多々あったが、このように大きなものはなかった。次の巻末部の例をも考え合わせると、ここでの国冬本は言経本のような異文を持っていなかった、とするのが自然であろう。

異文検討の最後として、「鈴虫」巻末部にある諸本間の大きな異同を取り上げる。まず、流布本をあげる。

中宮（秋好中宮）ぞ、なかなかまかだたまふこともいとかたうなりて、ただ人の仲のやうに並びおはしますに、いまめかしう、なかなか昔よりもはなやかに、御遊びをもしたまふ。なにことも御心やれるありさまながら、ただかの御息所（六条御息所）の御ことをおぼしやりつつ、行ひの御心すすみにたるを、人（光源氏）の許しきこえたまふまじきことなれば、功德のことをたてておぼしいとнами、いとど心深う世の中をおぼしとれるさまになりまさりたまふ。

（角川CD小見出し10巻末、『源氏物語別本集成』381616）

この巻末部を「（なりまさり）たまふ。」とするのは、今回校合した三〇本中のちょうど半数の一五本である。

〈文例14〉

たまふ「大成横氏池西肖日伏」…381663

たまひけるとそ「麦阿」

給 [陽三國]

給ふ [東]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、(六条御息所追善の) 御八講など行なはせ給ふとぞ [御]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [尾家雅鳳]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [高]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [俊]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なせ給ふとぞ [保]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [穂]

給。六条院にも、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [首入]

給。六条院に、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [湖]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ [中]

給。六条院も、もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふ [言]

これは、六条御息所のことを思う光源氏を語る場面で、巻のとりめとなるところである。(河内本群) や版本の本
文、そして言経本・保坂本・穂久邇本などには「もろ心に急ぎ給ひて、御八講など行なはせ給ふとぞ」ということば
があるのに、いわゆる青表紙本や麦生本・阿里莫本、そして国冬本は「給」「たまひけるとぞ」として終わっている。
ここで国冬本に異同がないことに注目したい。これまでの例から見ると、言経本のように「もろ心に急ぎ給ひて、御
八講など行なはせ給ふとぞ」とあつてよさそうであるのに、そうではないからである。私は、(文例 8) を境にして、

それ以前とそれ以降では、国冬本が伝える本文は質が異なっていると考えている。《文例8》までの国冬本には、「鈴虫」の形成過程を見せる異文が混入して伝流していると見られるからである。そして《文例14》とも関連して、「鈴虫」の後半では、国冬本は言経本とは異なる傾向の本文を伝えているとみてよさそうである。

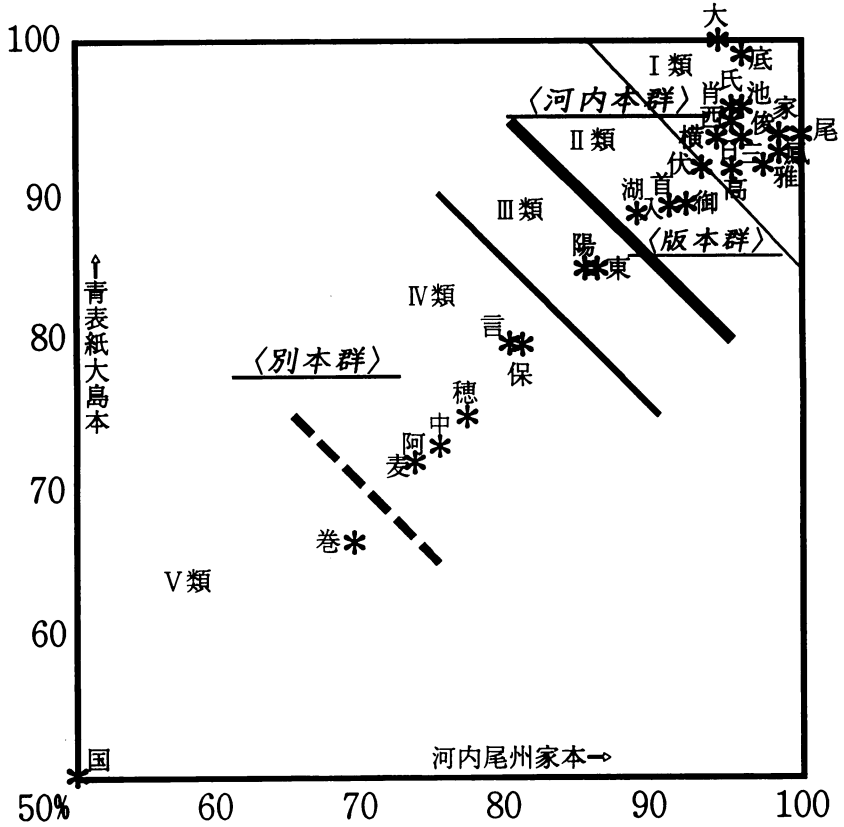
まとめ

『源氏物語』の本文研究は、六〇年以上も停滞しているのが実状である。『源氏物語大成』で「簡略ヲ旨」とされた本文群を翻刻し直しながら、各本文を対校した結果をもとにして特徴のある異同を検討し、異本・異文の世界の様態を探究していくことが急務であると考えゆるえんである。これまでに、〈河内本群〉と〈別本群〉という二群の分別試案を見通しとして得ている。

作品を読む以前の基礎的研究としての本文調査は、まだ緒に就いたばかりである。現在のところ、本文異同は物語における筋書きの変更には至っていない。しかし、細かな本文異同が大多数を占め、また本稿で検討したように、長文の異同も確認できている。こうした異同の集積から見えてくる全体像は、まだまだ解明されていない。というより、『源氏物語』が長編であるために、そのための手だてがあまりに煩雑であり、異文の全体的な位相を知ること放棄していたと言えよう。伝流する諸本の本文を徹底的に検証することは、文学研究の基盤整備として、早急に着手しなければならないことである。

最後に、「鈴虫」における書写本文の位相を知るための参考資料をあげておく。これは、諸本の本文異同を文節単位で数値化し、グラフにしたものである。手法については、拙稿「別本本文の意義——「滯標」における別本群と河

「鈴虫」諸本の相関関係図



内本群―」（『源氏物語研究集成 第十三巻 源氏物語の本文』平成十二年五月、風間書房）および、インターネット上の〈源氏物語電子資料館〉（<http://www.nijiac.jp/personal/to/HTML/kaken98/1236.html>）を参照願いたい。「鈴虫」三〇本に関する諸本間の異同傾向の詳細は別稿で報告することとし、ここにはその結果のみを掲載する。

〈注〉

〈文例 1 a〉

御気色なり「大成横氏池西肖三首入湖」…380355

御けしきなり「陽伏穂保俊」

御けしき也「麦中高」

御気しきなり「日阿東尾御家雅鳳」

御気しき也「言」

御気色なりとみにもえいて給はすとばかりおはします御めのとふるき人々もみなかなしきことをおもひつ、うちなきあへりひんかしのさうしの中にそおましあれはそなたにわたり給ぬ／さうし（判読）〔国〕

〈文例 1 b〉

給へり「大成横氏池西肖三首入湖伏保国麦阿中東」…380361

たまへり「陽日穂尾御高俊家雅鳳」

給へりとみにもえいて給はすと計おはします御めのとたちふるき人々なといまさらにかなしき事を思ひつ、うちなきあへり東の中の御さうしくちに御ましあれはそなたにわたり給ぬ／とみにもくわたり給ぬ\$〔言〕

〈文例 2 a〉

なけなるまで「国麦阿以外」…380468

なきまで〔麦阿〕

なくなむをのくかへりける宮月ころなんおそろしかりし御事なこりなやましうおほされて御をこなひなともけさやかにえならひ給はず御ねんふつのれうのす、あきかくしまきはし給へるをいまはかゝるかたの御有さまにてもなしこへ給て〔国〕

〈文例2b〉

給つ、「大成横氏池西肖首入湖穂保国尾御高俊家雅風」…380515

たまひつ、「日伏」

給つる〔中〕

給て〔陽麦阿〕

給ひつ、「三東」

給宮はおそろしかりし御事のなこりなやましうおほされておこなひなともけさやかにえつとめ給はず御念仏はかりのす、ひきかくしてゐ給へるをいまはかゝるかたの御ありさまにするし奉りて／給つ、宮はく奉りて\$かの宮をも、傍かの宮をも\$〔言〕

〈文例3〉

給ふ〔大成横氏池西肖首伏東高〕…380480

たまふ〔日三保御〕

給〔陽入湖穂麦阿中尾俊家雅風〕

給きやうなど御身つからおしへきえ給又さるへきあまたちなどのせかいあんのあたりになりふから物などならひしよをすくすたくひはうせに、たれとひとなこやからすみ、はせあいをいにふはしくたつねとらせ給へきにおほしおきてたり世中ひとへにおはしおこりあそひたはふれ事にうつらせ給にきしかたこそすこしいはけたる事もおはしましければのうきことを人しれすおほしするわか御心つからのことにはあらねとなを心つかひすへきよにこそ有けれなどおほしわかる、事ともありていとふかうのとやかに御をこなひをし〔国〕

給経などもみつからをしへ聞え給又さるへきあまたちの齋院のあたりなどにてさへふかく物よくならひて人からもいやしからず心はへあるなどをたつねとりてさ、はせて物ならはせ給へくおほしをきてたり世中をひとへにおほしあかりあそひたはふれこと

にうつり給しきしかたこそすこしいわけたる事もおはしましけれかのうき事をも人しれすおほしり我御心つからのとかにはあらねと猶心つかひすへき世にこそありけれなとおほしわくともありていとかくのとかに御おこなひをし給／経なと／し給\$、前1て\$、前4く+事「言」

〔文例 4〕

給て「大陽成横氏池西肖日三首入湖穂保言麦阿尾御高家雅風」…380539

たまひて「伏俊」

ナシ「中」

給はて「東」

給へとはたあふみのはつくらよりもいかめしきもの／＼はこまかにつきせず「国」

〔文例 5〕

はこひわたし「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏穂保国東尾御高俊家雅風」…380553

はこひわたしよろつくちすましうゆくすゑの御ありさまをおほしやりつ、／よろつ／おほしやりつ、\$「言」

はこひをかせ給「麦阿」

ナシ「中」

〔文例 6〕

さふらふ「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏穂保言麦阿東尾御俊家雅風」…380636

さふらふそてともよりもことくはへさせ給てさまことに思をきてさせ給をこなひよりほかにこのよのいとなみ心みたるましきほとにとよろつをとふらはせ給あきのころにしのわたとの、まへのなかいのひかしのにはをおしなへてのにつくらせ給へりあかたてまつるやとりのたれしていつみの水をくむへきとかひのいしなといとなまめきてしくはえさせ給て御しつらひことなるをもさまかはりあはれに見給てあけくれははなのつゆとそおちつ、つとめたにあま君たちの有さま中々におもふことなけ也「国」

ナシ「中」

ナシ／＋さふらふ〔高〕

〔文例7〕

やうにて〔大陽成横氏池西肖日三首入湖伏穂保表阿東尾高俊家雅鳳〕…330653

やうにて／と&う〔御〕

やうにてのとやかにおはしまし御ものかたりなともきこえ給に〔国〕

やうにてのとやかにおはします御物かたりなと聞え給に／のとやかに給に\$〔言〕

ナシ〔中〕

〔文例8〕

給はず〔大陽成横氏池西肖首入湖穂麦阿東高〕…330711

たまはず〔日三伏保中尾御俊家雅鳳〕

給はずさふらふ人もさこそ世をそむきけれとむ下にもてはなれつ御まめけはありかたしとおほしける／さふらふおほしける

\$〔言〕

給はずさふらふ人々もさらはよをそむけともむけにもてはなれつれくなる御すまひはなをいと心ほそかるへしめんを見てまつらは日はいかてふへきそとかなしかるへきことを思ひいふわかきみの月日にそへてうつくしうなりまさり給を人しれすあはれにおもほしなからあひなうはつかしつ、ましとおもひきこえ給しすちのましりて見もいれたてまつり給はぬやうなりおと、は心うしと思ひきこえ給しこともみなすきにしかたになりかはりたるよなれはこのころもかた／＼につらくあはれに心くるしとおほしなけきけるかしたつきたてまつり給ごとをんなみやたちとひとしくいづくしうもてなしきこえ給このこと心しれる人々し、うを、きて又なかりけりかの人なむなをよにあらましかはとあるにつけてもかゝるにもかならずあるま、にことうちましりわれも人もよのそしりおほくかたはらいたくて見たてまつることもかたからましとおほしへたつるにもよにおしまれあかぬ人にてうせたるはいとあはれにていのちをさへ心ある人のちきりとなむおほしけるか的一条の宮の心はせあさからすうちなかめすくすらんおほしやるにいと心くるしければとき／＼はせうそこなときこへ給えりけりいにしへならはなをもあらぬ心そひぬへきあたりとおもはずにそ大将の御まめやはかた時おほし、られける〔国〕

〈文例9〉

あるへき「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏中東絵俊」…380792

あらんいとまれにほのめくねなとけにこそことなるを「保」

あらんいとまれにほのめくねなどはけにこそことなるを「国」

あらんいとまれにほのめくほとなとけにこそことなるを「穂」

ありけれ「阿」

あるへき／き+いとまれにほのめくねなとけにこそことなれ「尾」

あるへきいとまれにほのめくねなとけにこそことなれ「御高家雅風」

有けれ「麦」

有へき「言」

〈文例10〉

給ふ「大成横氏池西肖首東御」…380868

たまふ「伏中尾俊家雅風」

給「陽日三入湖穂保言麦阿高」

給ふおほしひときなれとけにおりにつけてよはりときにつけてよろつもの、あはれもとりあはせたる心ちするにみつからの心ちにもと、めかたうよろつおほしつ、けらる、／ひととき〈判読〉「国」

〈文例11〉

おほく「大陽成横氏池西肖日三首入湖伏保麦阿中東尾御高俊家雅風」…380967

おほかる中にもあそひのかたのもの、はへはこよなううせたる心ちそしける／かる中にもしける\$「言」

おほかる中にもあそひのかたのものははかきりなき心ちし侍ける「国」
を、く「穂」

〈文例12〉

た、よはし給なと「大成横氏池西肖日三首入湖」…381259

た、よはさてなとさまく思給みたれていま、て侍／さて\$し給、さまく思給みたれていま、て侍\$「言」

た、よはしさなと「陽穂保麦」

た、よはしさなと／さへママ「中」

た、よはしたまふなと「伏尾高俊家雅鳳」

た、よはしと「阿」

た、よはしなとさまく思ひ給へみたれてなんいま、て侍へる「国」

た、よはし給ふなと「東」

た、よはし給な「御」

〈文例13 a〉

かけても「保穂以外」…381364

けになかきよのやみをおもひやるにはかりそめのこのよのいさ、かなる人のもとにはかりなとにおもひは、からんもいとおさなかるへきことなれとさなはへりける御くらゐをきはめよろつこのよにあかぬことなき御みなれといまひきかへしすこしもよのうちかたふきぬへからんことはさらにおほしよらてなんよかるへきたうときみちを心さし御心ひとつをすませ給ともをんなの御みはなにも「保」

けになかき世のやみを思やるにはかりそめのこのよのいさ、かなる人のもとにはかりなとにおもひは、か覽もいとをさなかるへきことなれとさな侍ける御くらゐをきはめよろつこの世にあかぬ事なき御身なれといまひきかへしすこしも世のうちかたふきぬへからんことはさらにおほしよらてなんよかるへきたうときみちを心さし御心ひとつをすませ給ともをんなの御身はなにも「穂」

〈文例13 b〉

給を「大陽成横氏池西肖三首入湖穂保国麦阿中尾高俊家雅鳳」…381369

たまふを「日伏御」

給ふを「東」

給ふをけになかき世のやみを思やるにはかりそめの世のいさ、かなる人のもときなと斗に思ひは、かるもいとおさなかるへき事なれとをのつからさなん侍ける御くらゐをきはめよろつこの世のあかぬことなき御身なれといまひきかへしすこしにても世のうちかたふくへからん事はさらにおほしよらてなんよかるへきた、たうとき道を心さし御心ひとつをすませ給とも女御の御身は何事も所せきなんいとをしう侍と聞えしらせ給を／けになかきしらせ給を\$「言」

〔文例14〕

たまふ「大成横氏池西肖日伏」…381663

給「陽三國」

給ふ「東」

たまひけるとそ「麦阿」

たまふ六条のぬんもろろ心にいそきたたまひて御はかうなとをこなはせたまふとそ「御」

たまふ六条の院も、ろこ、ろにいそきたたまひて御はかうなとおこなはせたまふとそ「尾家雅鳳」

たまふ六条の院もろこ、ろにいそきたたまひて御八かうなとおこなはせたまふとそ「高」

たまふ六条の院もろこ、ろにいそき給ておほんはかうなとおこなはせ給とそ「俊」

給六条の院も、ろこ、ろにいそき給て御はかうなとをこなせ給とそ「なせ（ママ）「保」

給六条の院も、ろ心にいそき給て御八かうなとおこなはせ給とそ「穂」

給六条院にもろこ、ろにいそき給て御八講なとをこなはせ給とそ「首入」

給六条院にもろこ、ろにいそき給て御八講なとをこなはせ給とそ「湖」

給六条院も、ろこ、ろにいそき給て御はかうなとをこなはせ給とそ「中」

給六条院もろろ心にいそき給て御八講なとおこなはせたまふ／六条院もろろ心にいそき給て御八講なとおこなはせ

たまふ\$「言」